

——団長に就任してから一年が過ぎた。

ブロッサムヒルの満開の桜の木の下で、この胸にひとつの勲章を授かった日のことを思い出す。

羨望、憧れ、期待。そういったものを沢山背中に受けて、故郷を旅立った日のことを思い出す。

「……あれから一年が過ぎて、めまぐるしく日々が通り過ぎていって。いろいろあったけど、今はなんとか上手くやれているのかな」

そんな呟きは、白い息とともに消えていく。

見上げる空はどこまでも高く、遠く彼方に一匹の鳥が飛んでいた。空の上は風が強いのか、上昇したり、下降したりを繰り返している。

まるで自分のようだな、なんて思う。団長としての一年目はそれなりに成功もあって、それなりの失敗も経験した。そのたびに浮いたり沈んだりを繰り返した。

ほんの少しの成功と、たくさんの失敗を積み重ねて人

は大きくなるというけれど、これで自分もすこしくらいは大きな人間になれただろうか。

鳥の眼下には、大きな街が広がっている。

ベルガモットバレー。スプリングガーデンを構成する世界花のひとつ『ベルガモットバレー』を中心に栄えた空中都市。クリスマス、そして年越しを目前に控えた街は、いつもと比べてどこか慌ただしい。おそらくパーティーか何かで使用するのだろう、大きな立て看板を持って移動する人。門松を抱えている人なんかもいる。ああ、あれはクリスマスプレゼントだろうか。

「……一年、あつという間だったなあ」

そんな呟きは、どこまでも続く高い青空に飲み込まれて消えていく。

——今年も、残すところあと僅かだ。

1.

「団長。ちょっと入るよ」

年の瀬が迫るある冬の日の昼下がり。終わりの見えな
い書類仕事に疲れ果て、だらしなく執務机に突っ伏して
いたところへ来客があった。

「団長、聞こえた？」

ドアをノックする音が続く。

「まだまだ未処理の書類、持てるだけ運んできたから
ちよっと入らせてもらうよ」

ドアノブを回す音。ドアが開かれて、再び閉じる音。

こちらに向かってくる小さな足音。立て付けの悪くなっ
た丁番が、ぎいっと変な音を吐き出した。

今度修理しておかないとな。

突っ伏したままの姿勢。頭の片隅でそんなことを考え
た。

こつこつと音を立ててこちらに向かってくる小さな気
配が、執務机の前でぴたりと止まる。

「……うわっ、なかなか凄まじい光景ね」

どうやら声の主はサンカクサボテンらしい。

顔を上げてみると、そこには目を丸くして驚いている
サンカクサボテンの姿があった。執務室の惨憺たる現状
に、流石のサンカクサボテンも驚かずにはいられなかつ
たのだろう。

この時期は、何かと事務仕事が多くなる。執務室は次
から次へと舞い込んでくる書類で溢れかえり、今では足
の踏み場もないほどになっている。

「いやはや。お疲れのところ悪いんだけど、これ、追
加させてもらうよ」

——ドスン！

とてつもない質量をもったものがどこから飛んでき
て、執務机に激突したような音だった。

まあ実際には、サンカクサボテンの運んできた書類の
束が、執務机の上に置かれただけなのだけど。

「騎士団本部も人使いが荒いわね。ああ、この場合は
団長使いと言ったほうが正しいのかもしれないけど」

サンカクサボテンがやれやれ、というふうに首を振る。
「形式ばかりの事務仕事、何もこんなに押し付けるこ
ともないのにね」